

室内オペラ「恋の浮島白蛇の夢」

～あらすじ～



【第一幕】

時は平安、後白河天皇の御代

紀ノ國三輪が崎の網元大宅竹助の次男坊豊雄は、風流を好む優しい男で
新宮《今の熊野速玉大社》の神官、安倍弓麻呂に和歌や学問を学び
通っていた。

そんなある日の事、新宮からの帰り道 にわかに黒雲が湧き起り降り出した雨に、
父竹助のもとで働く漁師の爺さまに雨宿りをさせてもらう。

爺さまの孫娘おみつは、豊雄が浮島伝説の大蛇で、自分を食べに来たと怖れる。
「おいのは、喰われたんとちやう蛇神様の嫁様になつたんじや」と笑い飛ばす爺。

そこへ《女次第》に乗って白蛇の化身眞女児と侍女のまろやが、雨宿りを乞うて来る。 あまりに美しく上品な眞女児の様子に豊雄は心を奪われ、アリア「ひとめで恋に～明日またお目にかかりましょう」と歌い、再会を願い笠と蓑を貸す。顔を赤らめまんざらでもない様子の眞女児。

その夜、豊雄が見た夢は、眞女児と共に酒を酌み一夜を共に甘き夢…

目覚めた豊雄は、朝餉もそこに眞女児の家へと急ぎ向かう。

眞女児の屋敷は、夢の中に出でたそれと同じ立派な住まいだった。

不思議に思う豊雄。 しかしアリア《私の身の上》を歌う眞女児の色香に
ほだされ、眞女児の求愛に戸惑い乍らもときめくが、自分は、稼ぎもなく父母兄
の世話になる身、それゆえ父母や兄の許しを得るためひとまず帰りたいと告げる。
眞女児は、うなづき、それならば夫婦の証にと立派な剣を豊雄に渡す。
分不相応な剣を持ち帰った豊雄をいぶかる家族。

折しもそれは、熊野権現に奉納された宝物で先ごろ盗まれた物であると知れて
三輪が崎中が大騒ぎに。 弁明空しく豊雄は、役人に捕らえられる。

翌日、真相を確かめんと現地に赴く役人達。

ところが、立派な屋敷は廃屋に変容し一同驚く中、鍛冶屋の翁が「名乗り笛」に
乗って登場。 三年前から人の住まわぬ廃屋で今や狐狸妖怪の棲み処と語る。

役人達は、眞女児の正体を見極めんと廃屋に踏み込むが、眞女児の妖術に翻弄
され這う這うの体で逃げ出す。 罪を解かれた豊雄は、家族の勧めで

大和の国長谷寺の参道で蠟燭屋を営む姉夫婦のもとで静養することとなった。

合唱《牡丹咲く寺初瀬寺～賑わう参道》一方眞女児は、妖怪白蛇でありながら、
人である若い豊雄への思慕を抑えきれずに姉夫婦の営む店に現れた。

逃げ惑う豊雄。 しかし眞女児の品のいいしおらしさに好感をもった姉夫婦に

勧められついには祝言をあげる。 幸せの日々。

悪い予感に苛まされる眞女兒は、アリア「この胸騒ぎ…眞女兒の回想初恋の夢」を切々と、また不安を払拭するように豊雄こそ自らの初恋の人と思いを込めて歌いあげる。 しかし予感的中！

しぶしぶ行った花見の宴で當麻酒人に正体を見破られ、本性あらわに瀧壺へと逃げるはめに…

【第二幕】二度までも謀られたと傷心の豊雄は、三輪が崎に戻り、芝の庄司の娘富子の婿に納まった。

「豊雄と富子の愛の二重唱～白蛇の怨」仲睦まじい寝屋に眞女兒が現れる。

豊雄の心変わりを責め、富子を憑り殺す勢いに恐れをなした豊雄は、舅である芝の庄司に離縁を申し出る。

舅は、旧知の道成寺の高僧法海に助けを求め、法海と若い僧の二重唱

「あなたそろしや！ 妖怪白蛇を退治よう！」と歌い、芥子の香を沁み込ませた法衣を持たせ、彼の館へと急ぐ！ あわれ眞女兒は法海の法力により、壺に封じられ道成寺の一角に葬られる。 真っ暗闇な壺の中、眞女兒の心に母「おいの」の声が傷ついた娘眞女兒の心に寄り添う。 女としての叶えられない切ない想いを胸に秘め、母おいのとともに天に昇る眞女兒。 原作では語られなかった奥深い想い…白蛇眞女兒の夢物語はエピローグの大合唱により感動的な終焉を迎える



あらすじ作文 杉山みかん

著作権 紀州の民話をオペラに実行委員会

